南部徳洲会・宇治徳洲会病院の医学物理士

日本医学物理学会学術大会・放射線治療計画トライアルで1位と2位に

南部徳洲会病院（沖縄県）の飯田洋介・放射線部主任（医学物理士、診療放射線技師）と宇治徳洲会病院（京都府）の石原佳知・放射線治療科医学物理士長兼診療放射線技師長は、第132回日本医学物理学会学術大会（8月28～30日、新潟市）で行われた放射線治療の時間制限付き治療計画トライアル（APT）で、好成績を収めた。同学会から選出された医学物理士36人が競い、飯田主任は「トモセラピー」部門で1位、石原・医学物理士長は「OXRAY」部門で2位に輝いた。

飯田主任と石原・医学物理士長が栄冠



表彰式後、大会長の宇都宮悟・新潟大学医学部准教授（中央）と記念撮影する石原・医学物理士長（左）と飯田主任





それぞれ自院で使用している放射線治療装置（上からOXRAY、トモセラピー）

放射線治療では、放射線を照射する前に「治療計画」を立てる。がんなど病変に対する効果は最大限に、周囲の正常組織に対する影響は最小限にするためで、医師の診察後、放射線治療計画専用装置を用いて、最適な照射範囲や照射方法、処方線量、治療回数などを計算、決定する。

一般的に、計画の作成や装置の精度管理、照射は、医師と診療放射線技師が行うが、近年、放射線治療の多様化、高度化にともない計画作成のプロセスが複雑化していることから、両者に加え、医学物理士の活躍が期待されている。医学物理士は物理学や工学のスペシャリスト。その専門知識を駆使して、コンピュータが行う計算や設定についても確認し、患者さん一人ひとりの病変に合わせ、より適した照射を選択する。

日本医学物理学会は主催する学術大会で、医学物理士の治療計画にかかわる技術を競うトライアルを企画。同一症例（専用装置で撮影したCT画像）・共通条件（照射方法など）下で治療計画を作成し、DVHパラメータ（標的や周囲の臓器に当たる線量と、その体積の関係を示す指標）をもとに点数化する。

過去の同様の企画では、約1カ月かけて計画をつくる形式だったが、今回から新たにAPTとして実施。臨床現場で求められる“限られた時間で質の高い計画を立てる力”を競う狙いから、会場で共通の症例と条件が示され、制限時間2時間半で計画をつくり上げる形式に変わった。従来の点数評価に、早く提出するほど加点されるタイムボーナスを加えた。装置ごとに計算方式が異なるため、トモセラピー、OXRAY、TrueBeam、Versa HDの4部門に分かれ実施。

多くの症例で磨いた速さと質

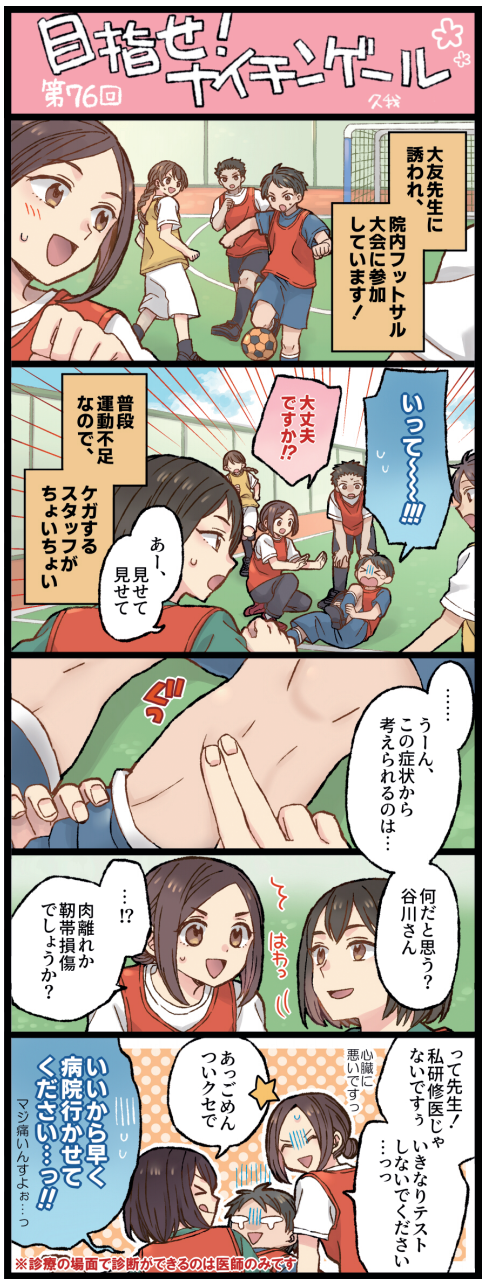
トモセラピー部門で1位となった飯田主任は、日頃から1～2時間で質の高い計画を立てることにこだわってきた。今回のAPTでも、その経験を生かし、4部門の受賞者のなかで最も高いタイムボーナスを獲得した。「日頃から多くの患者さんの治療に対応するため、治療計画のスピードと質にこだわってきました。それが実を結び、素直にうれしいです」と笑顔。

OXRAY部門で2位の石原・医学物理士長も「タイムボーナスのルールと、うまくかみ合いました」と、速さが奏功したと振り返る。「当院で治療計画最適化の担当は基本的に私ひとり。速く、数多く策定するのは、とても大事です」と話す。日本医学物理学会の理事も務めるだけに、「恥ずかしい成績は取れないという重圧がありました」と安堵の表情。

共に、制限時間を約1時間残して計画を提出。飯田主任は「受賞をゴールにせず、得たノウハウを後輩の指導やWEBセミナーを通じて、全国の技師、物理士に還元していきたい」と意欲的。石原・医学物理士長も、アジア・オセアニアの国際大会への参加を予定するなど、学術的な挑戦を続けていく考えだ。

医学物理士は、一般財団法人医学物理士認定機構が認定する資格で、放射線医療の物理的・技術的な課題の解決を担う。1987年に日本医学放射線学会が理工系大学の出身者を対象に認定制度を設け、96年に現在の名称となった。

2002年には、理工系大学の出身にかかわらず一定の条件を満たす診療放射線技師も受験できるようになった。資格保有者は6月時点で1,593人。がん診療連携拠点病院の整備指針で医学物理士の配置が望ましいとされ、医師の負担を減らすタスク・シフトの担い手としても期待が集まっている。



徳洲会体操クラブ

岡がアジア大会で銀4つ

名古屋病院応援団の声援受け

徳洲会体操クラブの岡慎之助が、日本代表として第20回アジア競技大会の男子体操（9月21～25日、愛知県）に出場、個人総合、団体、種目別の平行棒と鉄棒で、銀メダルを計4つ獲得した。また、開催地にある名古屋徳洲会総合病院の職員有志らが応援団を結成し、団体競技の日に会場で熱い声援を送った。



「悔しさを糧に世界選手権に全エネルギーを注ぎたい」と岡



団体で、あん馬を任された岡は「やりきって勝ちたかった」

大会の約3週間前に腰痛を発症するアクシデントに見舞われ、十分な練習を積めないまま挑んだ今大会の岡。個人総合では最後まで粘りの演技を見せ、銀メダルを獲得したものの、団体では最終種目の鉄棒で痛恨の落下を喫するなど、厳しい戦いとなった。

岡は金メダルには一歩届かなかった今大会を振り返り、「とても悔しい結果になり、自分のもっている力を100%出しきれませんでした」と胸中を明かした。けがの影響から厳しい調整が続き、大会終盤には疲労が蓄積。「練習不足を感じました。勝つところまでの準備がまだ足りていませんでした」と冷静に課題を見つめ直した。

大会を見守った新宅裕也コーチは、直前の腰の負傷など苦しい状況下での戦いを振り返りつつ、「ミスのない演技を見せた場面もあり、責任感や強さが付いてきました」と岡の成長を評価。指導陣側の課題として、コンディショニング管理を挙げ、「状態が良ければ必ず結果はついてきます。本人が力を発揮できるよう全力でサポートします」と語った。

また、応援団を結成した名古屋病院の職員有志らは、会場で岡の名前が入ったタオルを掲げ、熱い声援を送った。その姿に、岡自身も「SNSで見かけ、現地でもタオルを持っている方を見て、とてもうれしかったです」と感謝。観戦した職員からは「岡選手の活躍を間近で観ることができ、緊迫感を味わうことができました」、「岡選手の最後まであきらめない姿勢に勇気をもらいました」といった声が聞かれた。



名古屋病院の職員有志が応援団を結成して会場で熱い声援

第54回世界体操競技選手権大会（10月17～25日、オランダ）には、同クラブから岡と川上翔平が出場予定。岡は「今回、味わった悔しさを糧に、次の世界選手権に向けて全エネルギーを注ぎたいと思います。自分がチームをリードして、日本の体操界を盛り上げたいです」と力強く前を見据えた。

徳洲会グループの医学物理士在籍施設

札幌東徳洲会病院
日鋼記念病院（北海道）
羽生総合病院（埼玉県）
鎌ケ谷総合病院（千葉県）
千葉西総合病院
湘南鎌倉総合病院（神奈川県）
宇治徳洲会病院（京都府）
和泉市立総合医療センター（大阪府）
吹田徳洲会病院（同）
福岡徳洲会病院
南部徳洲会病院（沖縄県）

品川区主催の認知症啓発プロジェクト

大崎病院東京ハートセンターが参加



「認知症に対する正しい理解の普及に努めていきたい」と神部・看護部長（右）、大嶋看護師

大崎病院東京ハートセンターは、認知症に対する理解促進のため品川区が主催する「しながわ みんなで想う橙（オレンジ）プロジェクト」に参加、認知症啓発のシンボルカラーであるオレンジ色のお花紙で作成した花などで院内を飾り付けたり、相談先の窓口（在宅介護支援センター）などを掲載した『しながわオレンジガイド』（品川区発行）を配布したりするなど、啓発活動に協力した。

同プロジェクトは認知症基本法が定める認知症月間の9月に、品川区がさまざまな事業所などの協力を得て実施。同院は今回が初参加だ。

同院は9月の1カ月間にわたり、正面玄関の壁いっぱいにオレンジ色の鮮やかなお花紙で作成した花をハート型に飾り付け、患者さんに塗ってもらった品川区認知症啓発キャラクター“くるみちゃん”の塗り絵を掲示。受け付けや病棟も飾り付けを行った。

神部雅子・看護部長は「これまで高齢者施設の参加事例はあるものの、病院は初参加だと区の担当者から聞きました。当院も患者さんのなかには認知症の方がおられます。今後も認知症に対する正しい理解の普及に努めたい」と意欲的。医療連携室の大嶋美絵看護師は「啓発活動に協力するとともに、より多くの地域の方々に当院を知っていただきたいという思いもありました」と、これからも地域に開かれた病院づくりを目指す。